

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00737

研究課題名(和文) 西日本最高地点に立地する山稜の弥生遺跡群に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical studies on the Yayoi archaeological sites on the mountain ridge located at the highest point in western Japan

研究代表者

柴田 昌兎 (SHIBATA, SHOJI)

愛媛大学・埋蔵文化財調査室・教授

研究者番号：10735286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,900,000円

研究成果の概要(和文)：西日本最高峰の標高1982mの石鎚山を主峰とする四国山地で展開した山稜に住む縄文・弥生人の実態を解明した。標高1080～1100mの山稜上に猿楽遺跡や、その山稜に隣接する山間部に所在する標高約300mの坂本大平岩陰遺跡の調査では縄文時代晩期後半(約3000年前)、弥生時代前期前半(約2600年前)、後期中頃(約1900年前)に縄文・弥生人の活動した痕跡を確認することができた。その結果、両遺跡の消長は連動していることが判明した。このことから気候変動に影響されながらも交易・交通・移動と言う人間活動が山稜の遺跡群の主たる機能でキャンプ地のような集落であったと分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

低地で農耕に従事することが定説であった弥生時代において、山間部、特に標高千メートル前後の山稜に展開する弥生時代遺跡の存在は、山間部で生業や移動・交易など、水田農耕以外の活発な人間活動が行われていたことを示している。本研究では農耕に限らず、様々な生業が複合した多様性を持つ弥生社会が存在し、それは高位置の山稜部まで及んでいたことを明らかにした。こうした一連の研究結果は、弥生時代研究において新たな、そして重要な視点を提示することができた。

研究成果の概要(英文)：I elucidated the actual situation of people in the Yayoi-Jomon Period to live in the ridge that unfolded in Shikoku mountains including Ishizuchisan of 1,982m above sea level of the West Japan highest peak.

The Sarugaku site (elevation 1,080-1,100m) located on the mountain ridge and the Sakamoto Ohira rock shelter site (elevation 300m) located in the mountains were excavated and investigated. In the survey, traces of human activities of Jomon and Yayoi period could be confirmed in the latter half of the last Jomon period (about 3,000 years ago), the first half of the early Yayoi period (about 2,600 years ago), and the middle of the latter half (about 1,900 years ago). From the survey results, it was found that the fate of both sites is linked. This is likely to have been affected by climate change. It was analyzed that the archaeological sites on the mountain ridge had the main functions of human activities such as trade, transportation, and movement, and were villages like campsites.

研究分野：考古学

キーワード：山稜性集落 生業 移動 交通 交易 気候変動 縄文・弥生時代 多様性

1. 研究開始当初の背景

1950年代に始まった高位置立地弥生集落である高地性集落の研究は、先学の多くの研究成果を経て、機能面において「軍事的防御的機能」に特化した解釈が定型化し、国家形成史の一要素として議論されることが多い。ところが調査事例の増加に伴い、1つの機能に帰結させてしまうような単純な解釈論では説明できない状況が生まれている。

そこで研究代表者は、列島に存在する高地性集落の弁別作業を行い、2つの用語概念を提示した(柴田 2004)。比高差のある高位置に立地する集落景観こそが日常生活領域であった丘陵や台地、山頂や山腹に立地する弥生集落を総称して「山住みの集落」と呼称した。そして高地性集落は、狭義の高地性集落の要素である「軍事的防御的機能」を重視し、それが非日常性・非生産性のなかで形成された集落、あるいはそういう機能が付加され変貌した集落のみを「高地性集落」と呼称し、「山住みの集落」とは概念的にまったく異なるものとして定義づけた。

さらにこうした「高地性集落」の抽出過程で、各地域において丘陵や山頂・山腹などに「山住みの集落」が多く存在することが判明した。それら山住みの集落に居住する集団は、水田農耕に依拠しながら居住領域を丘陵や山腹に求めた集団、あるいは水田農耕以外の生業を主体とする集団など、地域や時期によって多様であることが指摘できる。

2. 研究の目的

標高約1100mの山稜上に立地する猿楽遺跡をはじめ、四国山地の山稜・山間部には、「山住みの集落」と思われる弥生遺跡が展開しており(図1・2)、農耕社会として低地を生活領域とする弥生集落の立地選定原理から大きく逸脱した存在である。こうした山稜の弥生遺跡の実態を解明する。本研究によって、これまで明らかにすることができなかった多様で重層的な弥生社会の実像を実証することができる。

3. 研究の方法

本研究では、山稜の弥生遺跡群の一つである愛媛県久万高原町に所在する猿楽遺跡・赤蔵ヶ池東遺跡の発掘調査を軸に、愛媛県から高知県に至る山稜部・山間部の類例を踏査・試掘を実施する。そして出土遺構・遺物の分析を通して、西日本最高地点に立地する山稜の弥生遺跡群の実態を明確にし、季節的移動・交易・畑作・狩猟採集・漁撈・信仰・木工など、様々な生業活動・人間活動を検証し、「山住みの集落」の実態を解明する。また遺跡が展開する時期が断続的であることを、気候変動・社会変動の両面から考察する。

具体的には次の3つの項目を実行した。

(1) 猿楽遺跡の発掘調査及び周辺遺跡の試掘・踏査の実施

遺跡の時期・規模・性格・立地環境を知るための最小限の発掘調査及び試掘調査を行う。遺跡の広がりや時期を把握するために山稜部の踏査・試掘を実施した。

(2) 四国山地の山稜部と山間部に営まれた弥生遺跡の実態解明と類例調査

高知県の山稜の弥生遺跡である鷹之巢山遺跡、坂本大平岩陰遺跡、居徳遺跡などを踏査・試掘する。

(3) 自然科学分析

遺跡の性格や立地環境を知るために発掘調査や踏査で得られた資料(土器や土壌サンプル)を用い、分析機関に依頼し、加速器質量分析による年代測定、同位体分析による食生活や移動履歴の復元を行った。

4. 研究成果

(1) 猿楽遺跡の発掘調査及び周辺遺跡の試掘・踏査の実施

① 猿楽遺跡の発掘調査と周辺の踏査(図3)

標高1100mの猿楽遺跡ではごく限られた範囲から縄文土器晩期後半・弥生時代前期前半の土器が出土、

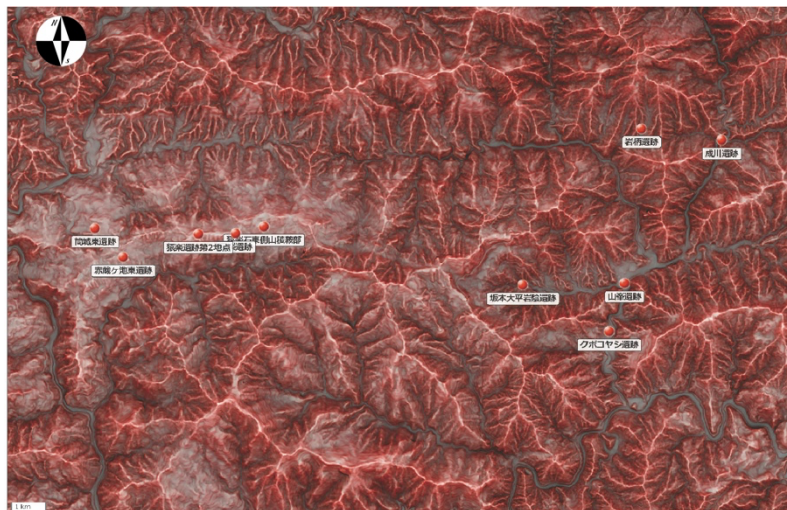


図1 山稜・山間部の弥生遺跡(地理院地図 GSI Mapsにて作成)

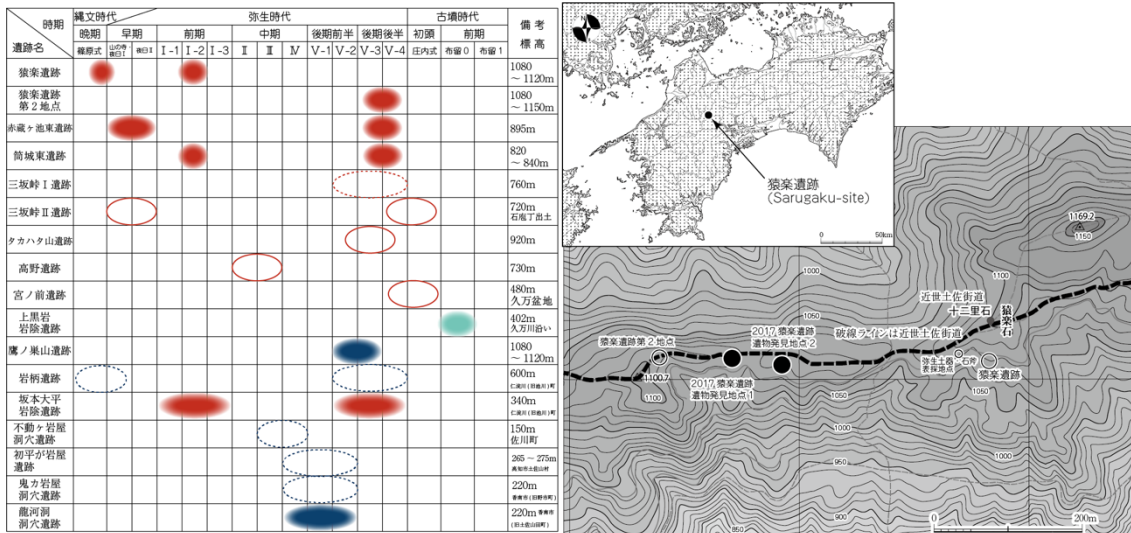


図2 山稜の弥生集落の消長

図3 猿楽遺跡の調査地点

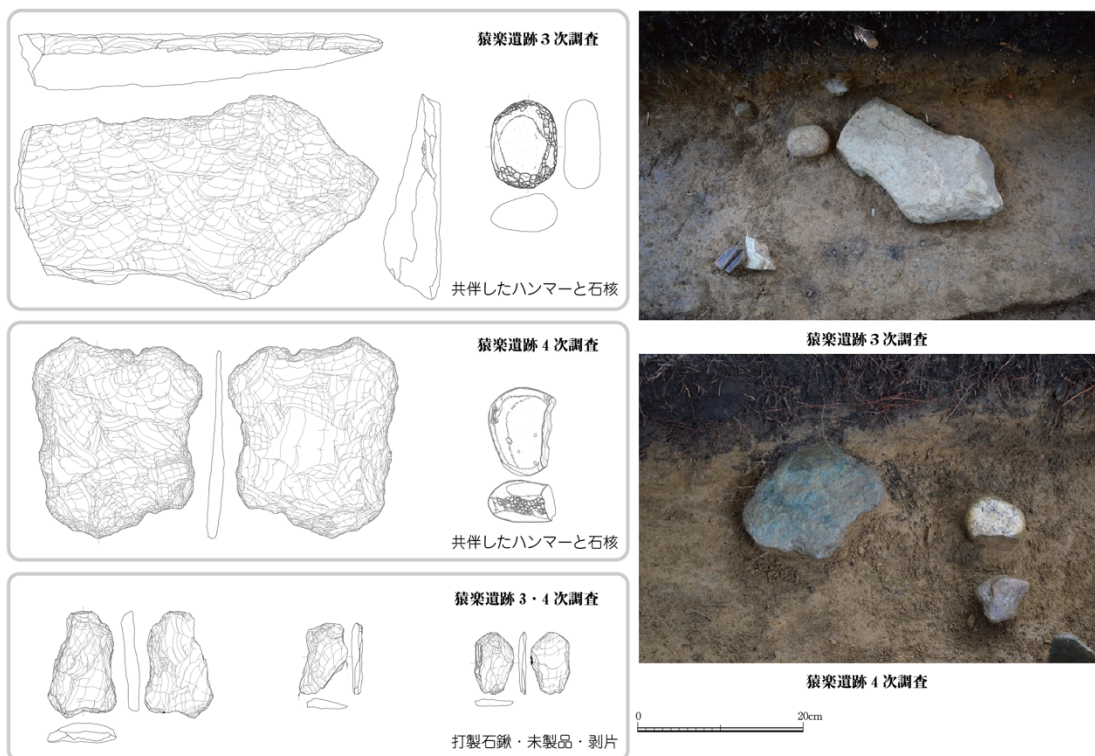


図4 猿楽遺跡出土ハンマーと石核、扁平打製石鋏ほか

それに伴って泥岩製打製石鋏製作跡、結晶片岩製打製石鋏の製作跡を確認した(図4)。石材は遺跡近辺に露頭する岩石を利用している。縄文時代晩期浅鉢には吹きこぼれによる炭素付着が確認でき、炭素同位体分析を行ったところ、非反芻動物の陸獣とC3植物を食していたことがわかった。

周辺の踏査では山稜南側緩斜面に沿って猿楽遺跡第2地点、猿楽遺跡東側山稜鞍部など、縄文時代晩期、弥生時代前期、弥生時代後期の出土遺物を採取した(図1・3)。

これらの時期に同一の山稜上の標高1000m前後に小規模な集団が散在しながら居住域を展開していることが判明した。

②赤蔵ヶ池東遺跡の試掘調査。

猿楽遺跡が所在する山稜に沿って東へ3キロほどの地点(標高約850m)に赤蔵池東遺跡が立地している。その遺跡範囲は確定するため、試掘調査を実施した。その結果、縄文時代後期・晩期、弥生時代前期・後期の遺物が出土し、縄文時代後期の石器製作跡を確認した。特に注文できるのは夜臼系壺形土器や弥生時代前期の土器が出土したエリアである。そこは比較的安定した堆積層が認められ、周辺に同時期の遺構が展開している可能性が高いことがわかった。猿楽遺跡もそうだが、安定した堆積層には黒ボク層や音地火山灰層が認められ、その年代と焼き畑などの雑穀栽培との関係に留意し、今後明らかにしていきたい(図5)。

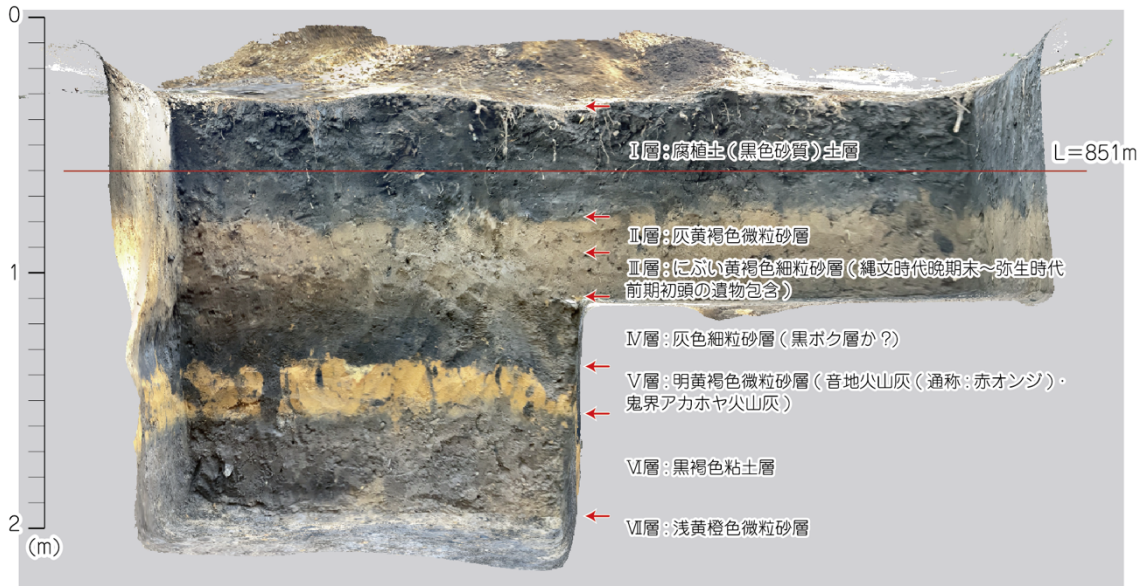


図5 赤蔵ヶ池東遺跡 2021 年度調査 AKE-D1 トレンチ東側断面
(2) 四国山地の山稜部と山間部に営まれた弥生時代遺跡の実態解明と類例調査

①坂本大平岩陰遺跡

猿楽遺跡が所在する山稜は近世段階に土佐街道が敷設されており、上述した猿楽遺跡周辺で確認した遺跡もこれに沿って分布している。その近世土佐街道が高知県側では松山街道と呼ばれている。猿楽遺跡が所在する山稜を高知県側に抜け、近世松山街道に沿って谷部に下ったところに坂本大平岩陰遺跡(高知県仁淀川町:標高約 350m)が立地している。この遺跡は 1992 年に池川町教育委員会と高知県埋蔵文化財センターによって小規模な発掘調査を実施しており、その出土遺物と層位を確認するため、試掘調査を実施した。岩陰部の比較的浅い堆積層(層厚約 30 cm)から縄文時代早期・後期・晩期、そして弥生時代前期・後期の土器が出土した。特に弥生土器の出土が多く、前期弥生土器は瀬戸内海沿岸地域出土土器と類縁性が高い。また後期弥生土器には結晶片岩性の打製石庖丁が共伴している。さらに猿楽遺跡などの山稜の弥生遺跡とその消長が連動していることが注目できる。

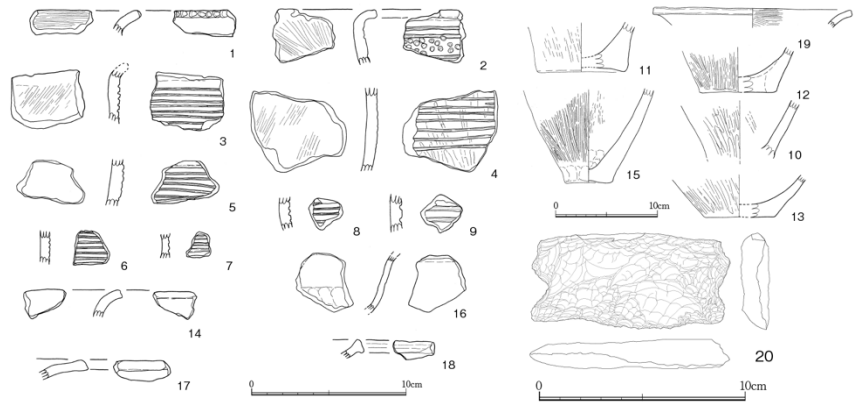


図6 坂本大平岩陰遺跡出土遺物

②鷹ノ巣山遺跡

標高 1982m の石鎚山に連なる四国山地の山稜部に標高 1100m の鷹ノ巣山遺跡(高知県の町)が所在している。この遺跡は 1970 年代後半に「高地性集落の研究」の一環として岡本健児によって調査された(図 7)。

本研究では現地確認を目的とした踏査を実施した。長らく調査地が不明であったが今回の踏査で場所を特定することができた。また出土遺物を再検証した結果、弥生時代後期前半の土器と判明、山間部独特の形状であることがわかった。またその類例が四国山地を挟んで瀬戸内海側の高地性集落である愛媛県西条市八堂山遺跡から出土していることをつきとめた(図 8)。後の江戸時代の山番が記した『寺川郷談』や、民俗学者宮本常一が『忘れられた日本人』で紹介した民俗事例にあるように、険しい四国山地を越えて移動している可能性が高い。

③居徳遺跡

山稜の弥生遺跡である猿楽遺跡で出土した縄文時代晩期の浅鉢は、高知平野に所在する居徳遺跡出土資料に強い類縁性がある。その関係性を明らかにするために居徳遺跡の試掘調査を実施した。残念ながら遺構・遺物の確認に至っていないが、既存の出土資料との比較を行うことができ、その類縁性が高いことがわかった。平地部と山間部双方向の人の移動を想定することができる。

(3) 四国山地における山稜の弥生時代遺跡の研究成果と課題

標高約 1100m の山稜上に立地する猿楽遺跡をはじめ、四国山地の山稜・山間部に展開している「山住みの集落」と思われる弥生時代遺跡群は、農耕社会として低地を生活領域とする弥生集落の立地選定原理から大きく逸脱した存在である。

本研究では、こうした山稜の弥生時代遺跡の実態を解明するため、発掘調査・踏査・試掘・自然科学分析などを行った。その結果、縄文時代晩期・弥生時代前期・後期後半に山稜に沿って遺跡が展開していることがわかった。出土遺物の分析からは低地の集落遺跡と共通する土器型式が山間部に持ち込まれていた可能性が高い。そして陸獣を食料に煮炊きを行い、周辺で採取できる石材で打製石鏃や打製石鋏を小規模ながら生産していたことが判明、キャンプ地として一定の生業を行っていたことが明らかになった。また一方で鷹ノ巣山遺跡のように山間部特有の弥生土器を有する集団も存在することがわかった。このように水田などの農耕可耕地を確保することができない山地において弥生人の多様な活動が確認されるに至ったのである。

ではなぜ山稜や山間で弥生人は活動したのか。

そこで興味深いのが、こうした山稜の弥生遺跡の分布が、近世の松山と土佐を結ぶ幹線道路「土佐街道・松山街道」に沿っていることである。遺跡の形成要因として人の移動や交易・交換などの人間活動に伴う可能性が高くなった。一方で鷹ノ巣山遺跡などの高位置立地の遺跡は山間部で独立した人間活動を行っていた可能性が高い。断続的な遺跡の消長は、山間部での人間活動が時間軸のなかで変動していることに起因している可能性がある。

以上の成果のうち弥生土器の分析を踏まえると山地に展開した弥生時代遺跡には平地部と共通する土器型式を有する集団 A と山地特有の土器型式を有する集団 B が存在することがわかる。さらに集団 A は平地部との関連性が強く、相互に移動している可能性が高い。一方、集団 B は独自性が強く、山地内で小規模な集団として点在している。さらに集団 A-B 相互にも関連がある可能性が指摘できる (図 9)。

このように山稜・山間部における弥生人の活動は、時空間の変化に応じて多義・多様な性格を帯びていることが予想され、その実態解明こそが弥生社会の実像を明らかにすることにつながる。

山稜の弥生集落が所在する地域は、農耕可耕地が十分に確保できない地勢・気候環境にある。現状では比較的平坦で緩やかな稜線とその稜線から降りる山間という地勢環境であること、近世の主要幹線道である土佐街道・松山街道に沿って遺跡が分布していることを踏まえ、交易・交通・移動と言う活動が山稜の縄文・弥生遺跡群の主たる機能ではないかと仮説を立てていることは上述したとおりである。その一方で集団 B の存在は、畑作や木工、狩猟採集など山独特の生業を主体としていた可能性を示している。また断続的な人間活動が同一の機能を維持していたかどうかとも留意しなければならない。そして遺跡の消長に見られる遺構・遺物の断続性は、生業活動の変化をはじめ、気候変動や社会変動が密接に関わっていることも重要な視点である。

本研究成果を経て、こうした新しい課題を解決するため、令和 3 年度より『基盤研究(B) 課題番号 21H00594(令和 3 年度～令和 6 年度)「山稜・山間に展開した弥生時代の人間活動に関する実証的研究」』としてステージアップした研究へと昇華し、継続している。

〈引用文献〉

- 岡本健児 1979 「鷹ノ巣山遺跡」『高地性集落の研究 資料篇』学生社
遠部 慎・柴田昌児・宮里修・宮内信雄・堀内晶子・吉田邦夫・宮田佳樹 2020 「猿楽遺跡出土土器の脂質分析—縄文晩期の四国山地—」『第 86 回総会研究発表要旨』日本考古学協会 88-89p
遠部 慎・柴田昌児・宮里修・蔵本晋司・竹原弘展・宮田佳樹 2020 「四国西南地域における縄文弥生移行期の雑穀類の年代学的研究」『日本文化財科学会第 37 回大会』日本文化財科学会 16-17p
高知県埋蔵文化財センター編 1992 『池川町 坂本大平岩陰遺跡 発掘調査概要報告書』
柴田昌児 2004 「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観 10 遺構編』小学館 315-330p
柴田昌児 2018 「山稜の弥生集落 猿楽遺跡の謎」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』雄山閣 161-164p
柴田昌児 2021 「瀬戸内海と用木山遺跡からみた山住みの弥生集落と高地性集落」『2000 年前の吉備～なぜ弥生人は丘の上に住んだのか～』赤磐市 93-109p
柴田昌児 2021 「瀬戸内海、芸予諸島の高地性集落」『季刊考古学 157』雄山閣 37-40p
宮里修 2019 「東松木式土器の系統と編年の位置について—南四国最古の弥生土器—」『高知考古学研究 3』1-28p

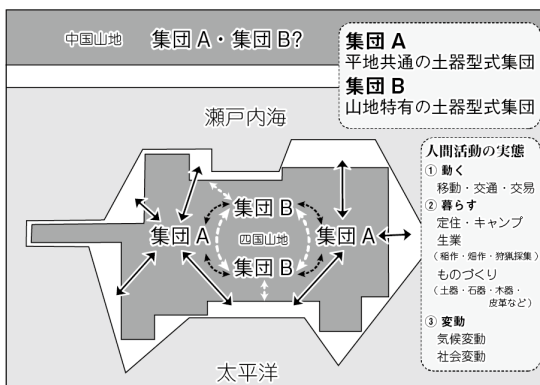


図 7 四国山地の弥生集落と集団関係

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柴田昌兎	4. 巻 1
2. 論文標題 山稜の弥生集落 猿楽遺跡の謎	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 初期農耕活動と近畿の弥生社会	6. 最初と最後の頁 161頁 164頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柴田昌兎
2. 発表標題 山稜に展開する縄文・弥生時代遺跡の調査 - 猿楽遺跡を中心に -
3. 学会等名 第30回中四国縄文研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 柴田昌兎・遠部慎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 愛媛大学柴田研究室・久万考現塾・久万町教育委員会	5. 総ページ数 40
3. 書名 久万山学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	遠部 慎 (Onbe Shin) (50450151)	島根大学・法文学部・客員研究員 (15201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	宮里 修 (Miyazato Osamu) (60339645)	高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・准教授 (16401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関